

〔古今著聞集十五宿執〕二條院御時かのおと〇藤原の作り給たる笛譜の説を、妙音院殿〇藤原に勅

問有けるに、いかにぞやある處を、少々奏せさせ給へりけるを、おと〇藤原の御夢に、彼大相國の御消

息あり、宗輔と書れたりけり、失にし人はいかにとあやしめて、ひらきて御覽すれば、そのかみ習

ひし道を、かたぶけ奏し給事こそ、口おしふ侍れと書れたりけり、おどろきおぼして、御參内有て、

彼譜に申候ひし事は、みなもろく〇ひが覺へに候けりと、奏しなをさせ給けり、

〔長明無名抄〕此道〇和に心ざし深かりしことは、道因入道ならびなき者なり、〇中千載集えらば

れ侍しことは、かの入道うせてのちのことなり、なきあとにも、さしも道に志深かりし者なれば

とて優して十八首まで、入られたりければ、夢のうちに来りて、涙をながしつゝ、よろこびをいふ

と見給たりければ、〇藤原殊にあはれがりて、いま二首をくはへ、廿首になされたりけるとぞ、し

かるべかりける事にこそ、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年十月十一日癸未、爲覽新造堂舍、將軍家〇源渡御大倉〇中此間善信於御前

申云、去建久九年十二月之比、夢想云、善信爲先君〇源御共、赴大倉山邊、爰有一老翁云、此地清和御

宇、文屋康秀爲相模掾所住也、可建精舍、我欲爲鎮守云云、夢覺之後、啓此由、于時幕下將軍、御病中也、

忽催御信心、若及御平愈者、可有堂舍造營之由、被仰之處、翌年正月薨御、不被果之條、愚意潛爲恨、而

當御代、依自然御願、有此草創、併靈夢之所感應也、境內之繁榮也云云、仰云、上又先年依有夢想之告、

今所企之也、是何非合體之儀乎、古今事書者、文屋康秀爲參河掾、欲下向、出立于縣見哉之由、誘引小

野小町云云、彼兩人、共逢于仁明之朝、可當清和御宇哉云云、善信云、夢中事、誠以難備實證、但見古陰

書、康秀者、元慶三年、任縫殿助、歟、然者、仕清和朝之條、無異儀歟、相模掾事、未勘之云云、將軍家、頻以有

御感、仰範高、被記此問答之趣也、可被作當寺緣起、以此夢記、可爲事初之旨、内々被仰云云、

〔古今著聞集四文學〕都良香竹生島に參りて、三千世界眼前盡と案じ侍て、下句を思ひわづらひ侍り